

セッションA「批判理論の成立過程：初期ホルクハイマーにそくして」

本セッションは、細見を世話人とし、青柳雅文会員と楠秀樹会員に発表いただき、討論者として上野成利会員に登壇いただいた。発表者のお二人には十分な準備をして発表いただき、討論者の上野会員からは「批判理論」との関係において貴重な議論を提起していただけた。ホルクハイマーの初期についてはまだまだ未解明の部分が大きく、社会思想史学会においてこれについて充実した発表を聞き、議論を交わす時間を持てたことはたいへん意義深いことだった。反省点としては、会場参加者との議論の時間を必ずしも十分に切り切れなかったこと、また参加者が25名程度にとどまったことをあげることができる。

以下、各発表者、討論者からの報告とする。(細見和之)

発表1

青柳 雅文：はざままで行き来する思考——若きホルクハイマーの哲学思想

本報告では、ホルクハイマーによる批判理論の確立との関連から、若き彼の哲学思想の形成過程をたどった。まず彼の教授資格論文では、コルネリウスに従い、実践哲学で扱われる対象を理論哲学の枠内で問うた。その一方で彼は同時期に私的な書簡の中で、実践的問題への取り組みに消極的なコルネリウスを批判的していた。次いで私講師就任講演では、認識論と形而上学との比較検討がおこなわれ、対象を歴史的、具体的、現実的なものとして理論的に把握可能なヘーゲルの弁証法に意義を見出していた。さらにレーニンの著作への書評の中では、マルクス主義的な世界観に肯定的な評価を示したが、同時に問題点も指摘していた。

以上のような過程の中で、ホルクハイマーは実践的な関心をともない、社会や文化などの、現実の対象に関心を寄せつつ、いずれも理論と結びつけていた。こうした一連の彼の思考の営みには、批判理論の萌芽となる契機が見出された。

本報告にたいして討論者および会場の参加者からコメント・質問があったが、これにたいしては次のように応答した。確立された「批判理論」とはあくまで社会にたいする実践的関心と、社会にたいする理論的な説明の統合の営みである。また、ホルクハイマーが当初から関わるカントの批判哲学という座標軸は、「批判」という姿勢とともにマルクスの経済学批判、そしてホルクハイマーらの批判理論へと継承され、その姿勢は今日でもなお社会にたいする重要な観点のひとつとなっている。マルクス主義にたいする態度が変化した契機は、アドルノら研究所メンバーから受けた影響も考えられる。問われている対象が理論で説明できない場合に、やはりホルクハイマーらは理論で説明することにこだわっており、そのことが彼らの思想の特色のひとつになっていたと思われる。

発表2

楠 秀樹：ホルクハイマーの「新しさ」—実証主義と形而上学への批判

本報告は、フランクフルト社会研究所とヴィーン学団の統合という計画があったがそれ

が破綻した過程を描いた。両集団は、学際的に既存の科学の力を動員し、社会の形而上学に陥らずに批判していくという点でおり、しかも、背景に両者ともにマッハ哲学があるということを示した。しかし、ホルクハイマーの「批判理論」は、ヴィーン学団の論理実証主義さえも科学的世界を信仰する新しい形而上学だと批判した。それは単なる観察者の視点にとどまるものであり、これに対してフランクフルト学派の「批判理論」の立場は、歴史の実践主体として関与し、社会に「新しさ」(既存の社会にない何か)を求める視点であると確認した。

本報告の質疑応答について。報告者自身はフランクフルト社会研究所とヴィーン学団の統合を望ましく思うのか、統合しなくてよかったと思うのかという質問があった。報告者は、統合は面白かったのではないかと考えている。それは科学技術に内在的な視点からの批判理論が展開できていたのではないかと考えるからである。科学技術のもたらす影響はますます深刻になっていると思う。

その点では、アーノルド・フィーンバークのようなアメリカでのマルクーゼの弟子の系譜は科学技術内在的な批判理論の可能性ではないかと思うので、そこをどう考えるかという質問があった。報告者は、フィーンバークによる科学技術への批判理論という方向性を示唆する報告の結末も考えていた。しかし、実際の報告までに十分に彼の議論を読み込まず、今後の課題としたい。

討論者：上野成利

一般に「批判理論」の成立過程が語られる場合、ホルクハイマーの二つの論考がその画期をなすものとして引き合いに出されてきた。すなわち、出発点と目される講演「社会哲学の現状と社会研究所の課題」(1931年)、到達点として位置づけられる「伝統的理論と批判的理論」(1937年)、この二つである。しかしもちろん出発点にはさらにその前史があり、到達点に至る途上にはさまざまな紆余曲折がある。青柳報告は前者に、楠報告は後者に主にスポットライトを当てるものであり、本セッションは1930年代における「批判理論」の成立過程を立体的に解明しようとした意欲的な試みであったといつてよい。

いま改めて青柳報告と楠報告を振り返ってみると、両報告に通底していたのは、マッハ主義をどのように考えるべきかという問いであった。青柳報告では、ホルクハイマーがマッハ主義の限界をマルクス主義で克服しようとした点が強調されたが、他方で楠報告は、マッハ主義から論理実証主義に至る知的潮流のうちにフランクフルト学派が取り逃してしまった思考の契機が含まれていた可能性を示唆するものでもあった。もちろんマッハ主義の非歴史性は弁証法的な思考には馴染まないし、論理実証主義に結実する科学主義が批判理論と折り合いが悪いこともまた否めない。しかしホルクハイマーがスピノザの名を折に触れ引き合いに出すところからも推察されるように、彼の「唯物論」は必ずしも狭義の史的唯物論に回収されるものでもない。主観／客観の二元論を乗り越えようとしたホルクハイマーの企図が、主観の脱中心化を図るマッハ主義の試みに触発されたものであったことは間違い

ないだろう。いずれにせよ、「批判理論」の根底にはヘーゲルやマルクス以外の思考の系譜が多層的に潜んでいるという（当たり前だが看過されがちな）ことを、改めて考えさせられる貴重な機会となった。報告者のお二人には心より感謝を申し上げたいと思う。